

「教学と現代11」海外伝道の現状と課題シリーズ

—教団の布教拠点なき国でのパイオニア伝道の現在—第1回
金子 昭

標記の講座が1月28日、天理大学研究棟第1会議室にて開催され、天理大学及び天理教海外部関係者など約50人が参加した。この講座は、2012年度から始まった3年間の企画「海外伝道の現状と課題シリーズ」の第3回目のものである。

今回（シリーズ最終回）のテーマは、「教団の布教拠点なき国でのパイオニア伝道の現在」。教会本部による布教拠点のない国で、共産圏や紛争地域など、国情や政治体制の相違による諸困難を乗り越え、パイオニア的な布教活動をしている教友にその体験を報告してもらった。今回、取り上げた国は、ロシア／ウクライナ、中国（大陸）、カンボジアの3国。これらの国における天理教の布教伝道の現状と課題について学んだ。

深谷所長による開会挨拶に続き、担当の金子昭が趣旨説明を行った後、第1講として、曾山俊・陸牧前分教会長が、「ロシア／ウクライナ伝道の現在」と題して講演。

曾山氏がロシアでの伝道を志したのは、24年前の1991年にソ連邦が崩壊した頃、今こそ困難なロシアに布教すべきだと決心したことに始まる。翌年から毎年のようにロシアに行くことになった。その時に心掛けたのが、底無しの親切という精神であった。当時、天理大学ロシア学科教員だったボンダレンコ氏とも交流を始めその結果、同氏も別席を運び、ようぼくになった。やがてロシアから同氏の母国であるウクライナへと道が伸びた。ウクライナはスラブ民族の“本家筋”にあたり、ソ連邦時代を経ても元々の信仰心は決して揺らいでいなかった。曾山氏は、刑務所等に出向いて教誨講話をしたり、希望者にはおさづけを取り次いだ。そうした活動も4年前にいったん停止をし、昔の天理教布教師のようにおさづけ取り次ぎを中心に据えた活動に専念することを決意して、現在に至っている。講演の最後に、曾山氏はかつてのロシア国歌のメロディーによる自作の替え歌「あらきとぅりょう賛歌」を披露した。

続いて第2講は、吉川裕利・葛上分教会役員が、「中国伝道の現在」について講演した。

吉川氏は、本教の中国伝道の回顧から話を始め、かつての満州天理村の現在の様子などをスライドで紹介した。現代の中国の体制下では、「信教の自由」は認められているものの、宗教組織等の設立や布教・宣伝活動は認められていない。一方、台湾では伝道庁が設置され、日華断交以降にもかかわらず教勢は進展している。中国に対しては中台の兩岸関係を通じ、留学生等を介して教えが伝わっている。

日本からの直接的交流は、主として文化・教育活動を通じて行われるが、さまざまな事情で中断や中止を余儀なくされる事態が生じているのが現状である。葛上分教会でも北京で2009年に日本語学校を開校し、一時は生徒数も100名近くにまで伸びたが、北京オリンピック終了の余波で賃貸料が高騰し、やむなく存続を断念せざるをえない仕儀に至った。また、2012年には天理大学から協定校である北京師範大学への訪問団を企画し、これに葛上分教会も参画することになったが、折しも尖閣

国有化の問題により中国の態度が硬化して中止になった。こうした諸困難を感じながらも、祖父以来の中国との関わりを胸に、今後も中国へと道をつなげていきたいと、吉川氏は語った。

そして第3講では、田中親男・慈林分教会長が「カンボジア伝道の現在」というテーマで講演した。

田中氏は当初、ラオス伝道を考えていた。それが日野皓正ディナーショーに参加したことがきっかけになって、カンボジアで活動しているNGO「蓮の会」代表の木村エミ子氏と会い、2001年にカンボジアで日野氏のコンサートを開催するに至った。カンボジアに道がついたのは、この時以来のことである。その後、現地でオリガミスクールを設立していた木村氏が別席を運ぶようになり、やがて2009年にプノンペンで布教所を開所する。その間に、カンボジア王室との交流も深まり、シリウッド殿下にもおちばがえりを果たしてもらったり、天理大学国際参加プロジェクトとも連携した活動を行ったりした。現在ではプノンペン布教所からようぼくが65名、修養科修了者52名など、大きな信仰的成人の成果を得ている。田中氏は、木村氏に道がついたところからカンボジア伝道が始まったことを強調。現地における同氏の信用・名声はとて高く、カンボジアへの貢献も多大なものがあると評価して、講演を締めくくった。

最後に、佐藤浩司主任の司会進行による総合討議が行われ、フロアも含めて幾つかの質疑応答がなされた。

その中で、現地で信者になった人々への丹精についての質問があり、3氏は次のように答えた。田中氏は、自らは信仰の角目をしっかり教えていくと共に、若者にTLIで日本語教授法を学んできてもらうことで、現地での教育を充実させることに期待を寄せた。吉川氏は、中国では日本への留学希望者が多いので、短期留学など天理大学の受け入れの充実を要望した。また曾山氏は、ロシア人にとって来日自体に多額の金銭的負担がかかるので、別席も中席止まりになっている状況を指摘。満席まで行ってようぼくになってもらいたいという意気込みを語った。

その他、今後の課題としては、曾山氏からはロシア語で歌って踊れる「みかぐらうた」の実現可能性、吉川氏からは国家間の政治的問題が民間交流にも影響を与えること、田中氏からはカンボジア語（クメール語）による別席の実現可能性や現地に派遣する人材養成について、それぞれ問題提起がなされた。

本誌では、来月号より3氏の講演の要約を順次掲載していく予定である。



講師を囲んでの記念撮影